江差町立南が丘小学校　　研究部通信

南小たば風通信　２０１９

令和元年　8月19日　第１２号

7月22日（火）弘前大学教育学部付属小学校で開催された研究大会に参加させていただきました。

１．研究概要・オリエンテーション

この学校の研究主題は,「協働・対話を通して納得解を導く子の育成（１年次)」でした。平成27年からの前研究「共に学ぶ～アクティブラーニングの視点に立って～」の成果と課題の振り返りから「協働的な学び」は児童の資質・能力の育成に有用性が認められたそうです。そこからさらに児童の資質・能力の育成を行うために上記の研究主題を設定したそうです。

ここでの納得解とは，自分で納得し他者にも一定の評価を得られる解のことだそうです。

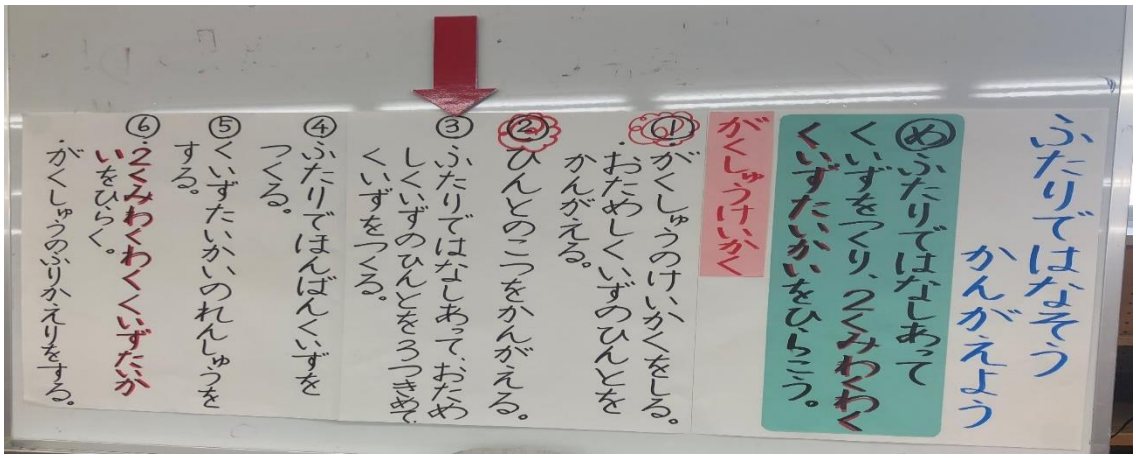
２．国語の授業について

今回の研究会では提案授業２回とも国語の授業を参観させていただいたため，初めに国語の授業の研究全体について書かせていただきます。国語の研究では目指す児童の姿を「言葉の力を自覚し，自らの言語生活に活かす児童」と設定していました。目指す児童の姿を具体化するために視点１　単元計画の工夫，視点２　目的や相手を意識した対話について視点を２つ設定していました。(詳しい内容は資料，研究紀要を参考にしてください)

３．提案授業①　第１学年　単元名　ふたりではなそう，かんがえよう

教材名　これはなんでしょう（光村図書　１年下）

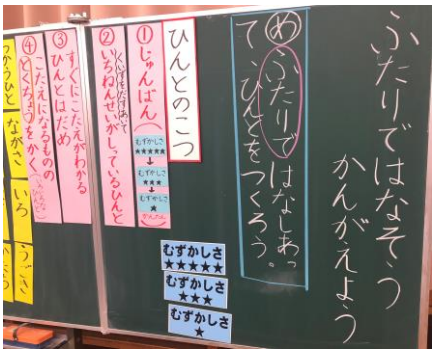
（１）　授業のおおまかな内容

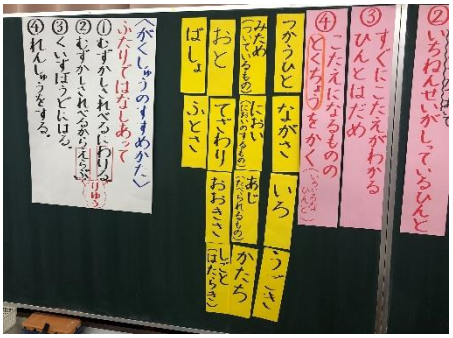


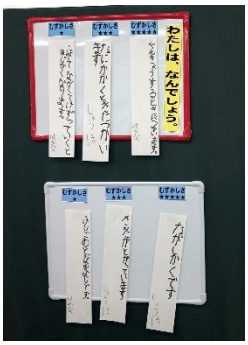
この教材は，２人で問題やヒントの内容・順序について話合いクイズを作り，作ったクイズを出題したり友達が作ったクイズに答えたりする内容でした。本時では主に２つの活動を行っていました。１つ目，２人１組でペアを組み，前時に作成したヒントカードを６枚（1 人３枚ずつ）からヒントを３つ選ぶこと。２つ目，ヒント 3 つの難しさ（難しい，普通，簡単）を選択すること。２つの活動をペアで行うこと通して合意形成を図ることを目標とした授業でした。

（２）本時の流れ

①前時の振り返りを行っていました。児童はクイズのヒントのポイントについて思い出していました。②課題の確認。単元計画を踏まえ児童の発言から課題（課題　ふたりではなしあってヒントをきめよう）を設定していました。（C　ヒントの内容が不安だからお友達と相談してみたい等）1 年生段階から前時の内容と単元の最後の授業の活動（クイズ大会）を踏まえ課題の内容が出せることに驚きました。③課題解決のための対話。ここでは２つの活動をしていました。1つ目，二人で話し合ってクイズのヒントの内容を６つから３つにする活動。クイズのヒントのレベルを三段階に分ける活動。の２つです。大体３分の２の児童が上記の活動を通し合意形成することができていました。ここでの合意形成は，なんとなくではなく理由もってカードの枚数を絞る活動やヒントのレベルを３段階に分ける活動だそうです。また二人で話し合いを通して新たなヒントを作成することができている児童もいました。④本時の振り返り・次時の確認でした。本時の振り返りの際はほ全ての児童が発言しようとしていました。







（３）授業を通し感じたこと

・設備について　国語専用の教室があることに驚きました。畳の場所がありました。ペア活動をしやすいように横長の大きな机に 2 人で１つの机を使って活動をしていました。エアコンも完備していて驚きました。

・児童の様子　児童の授業態度が素晴らしかったです。先生の発問１つ 1 つにほぼ全員が反応していました。本時では児童に手を挙げて発言させる場面はまとめしかありませんで

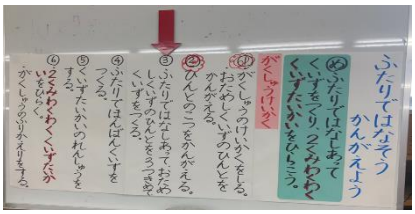
した。なので，児童は，手を上げずに発言をするのにも関わらず，話が授業の内容からそれずにふざけたりしないで活動できる。先生が話し始めたら静かになるという育ちの良さを感じました。児童たちが目を輝かせて授業を受けている様子から，教材の魅力について先生が伝えられているではないかと思いました。勉強が楽しいから切り替えや発言ができている気がします。私も教材の魅力を感じさせられる授業ができるようになりたいです。

・単元計画について　とても工夫されていました。児童の発達段階から教科書下の内容を今の時期に行っていること。クイズ大会という児童にとって魅力的な内容を単元の最後の時間に設定し児童の意欲を高めていました。

・授業者について　当たり前ですがとても力がある先生でした。何気ない一つ一つの発言が分かりやすく意図がありました。「どうして？」としきりに児童に問いかけることで児童が理由を考えられていました。

（4）分科会について

文科会では沢山意見が出たわけではありませんでしたが，素晴らしい質問が発表されていました。その中には難しすぎて何を聞いているのか分からないものも。勉強不足でした。出た意見は以下の通りです。



・単元計画の工夫について

まとめると以下の３点が大切という話になりました。

１点目，１時間目に，単元を通してどのような力を身につけるのか，１単位時間でどのような力が身につくのか学習の見通しを立てる時間を設定する。（南小も同様ですね）

２点目，単元の最後の時間に単元を通して身についた力を言語化，可視化することで振り返らせる活動を設定すること。（単元の最後に身に付けた力をアウトプットしたり自分や他人に評価したりすることで身についた力を確認すること？）

3 点目，児童が教材に必要感をもって向き合うような言語活動を設定すること（南小も同様ですね）

・対話の目的について

思いや考えを広げること，深めまりをうながすこと，思考の強化を行うこと。（ピクトグラム参照）

・毎時間の授業で観点（めあて）を明確にして児童に落とすことができているので，大きな骨組みのある授業ができている。

今回の場合授業者がしきりに「どうして？」と児童に問いかけることで児童が理由を考えてヒントを考えることができていた。

・評価は，抽象的な言葉ではなく，具体的なほうが良い。

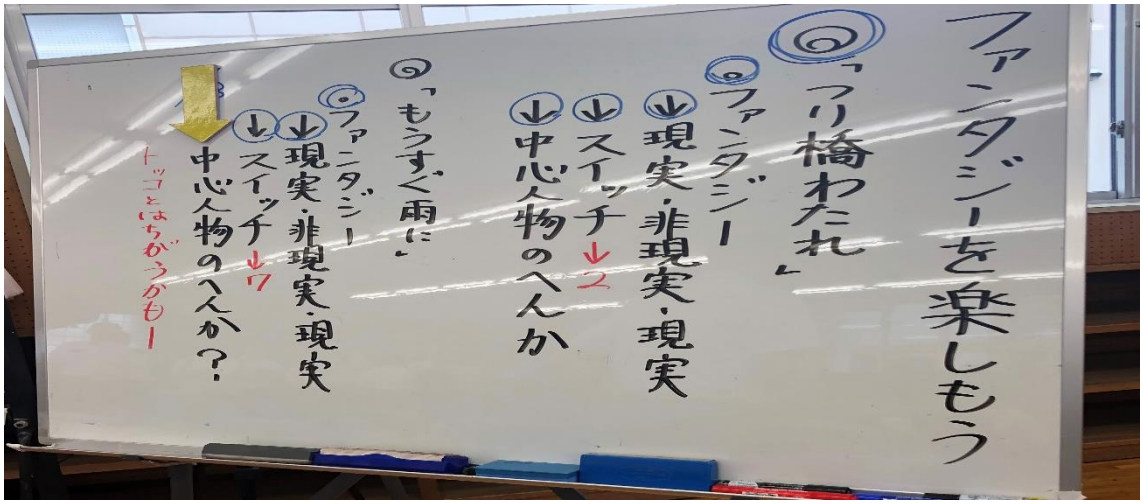
４　提案授業②　第３学年　単元名　ファンタジーを楽しもう

教材名　「もうすぐ雨に」　朽木祥（光村図書　三年上）

「つり橋わたれ」　長崎源之助（学校図書　三年上）

（１）　授業の主な内容

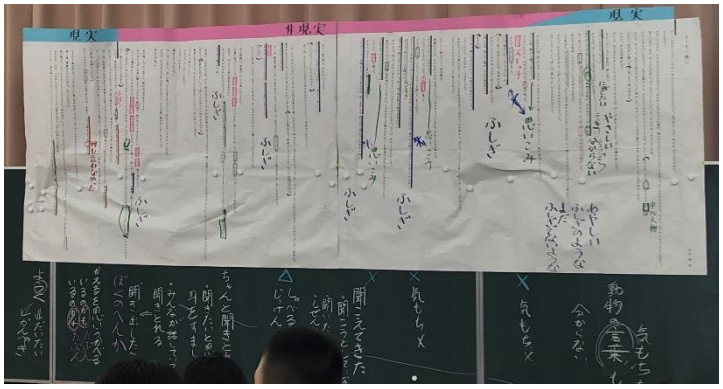
この単元は，現実，非現実，現実という場面と登場人物の物の見方，考え方を結びつけて読む「読み方」を身に付けさせたい単元だそうです。このような経験を生かして夏休みのファンタジーの作品を読んでほしいそうです。本時では登場人物の行動や気持ちについて叙述を基に捉えること。登場人物のものの見方・考え方の変化について，場面の移り変わりと結びつけて具体的に想像することを目標にしていた授業でした。教室の黒板に教科書の全文（今まで読みとった内容も書いてありました）を貼り大切な場面や登場人物の描写に注目しそれを踏まえ，主人公の気持ちの変化を下の黒板に記入していきました。

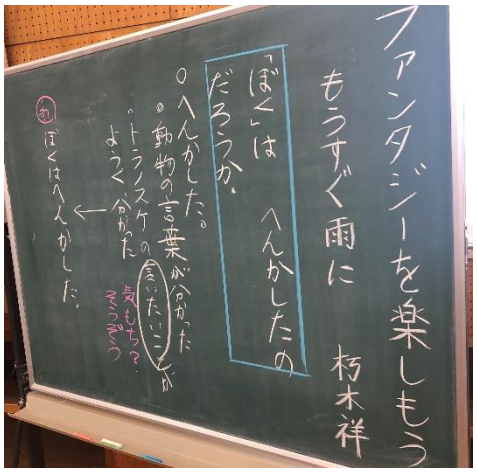


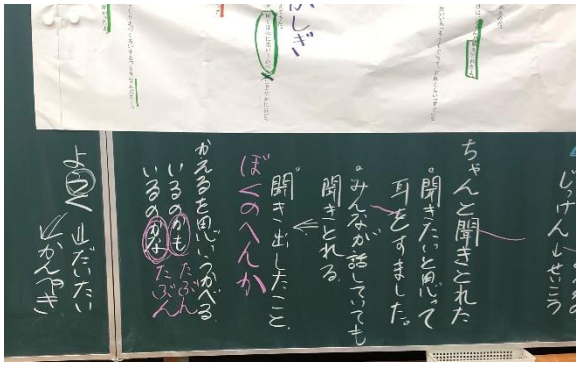
（２）　本時の流れ

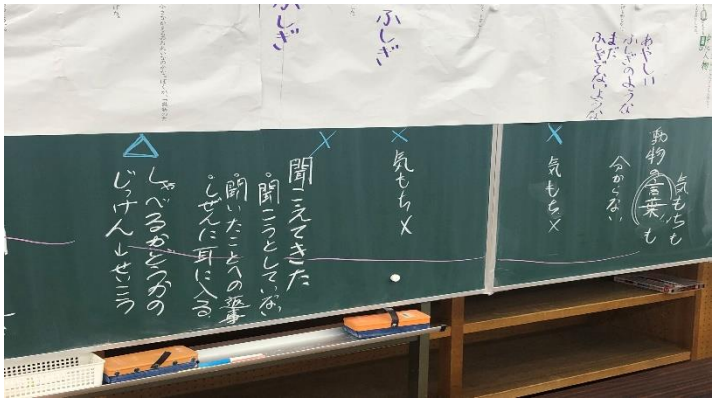
①前時の振り返りを行う。「もうすぐ雨に」の作品の特徴を振り返らせていました。②課題把握です。指導案上では「『ぼく』は本当にへんかしたのだろうか」という課題でした。本時では児童の様子から「『ぼく』はへんかしたのだろうか」と板書しました。その後「本当に？」と児童に問いかけたかったようですが，授業者が「本当に？」と言うのを忘れてしまったようです。「本当に？」と後で問いかけることで，児童により深く変化を読み取らせたかった様です。③授業者は本文の重要な記述の部分に児童を注目させ，主人公の気持ちの変化について児童に問いかけていました。その中でも特に重要な部分は４人１組で話し合う活動をしていました。児童の様子を見て見ると，少し眠そうな児童や少し飽きてしまっている児童もいました。もう少し本文を読み取らせるにしても，工夫があっても良かった気がしました。④今日の振り返りです。分かったことを記述する場面では，レベルが高くほぼ全員の児童が主人公の微細な気持ちの変化に気が付いていました。そう考えると本文の内容は読めていたので，あまり面白みがなくても本時の活動としては良かったのかな？と感じ

たりもしました。









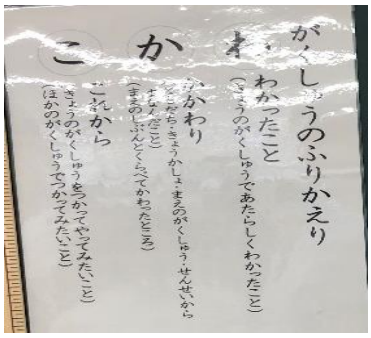
（３） 授業を通して感じたこと

・児童の思考のレベルはとても高かったです。ほぼ全員が主人公の気持ちの変化を読めていました。

・本文の印刷がごちゃごちゃしていて見づらかったです。本時だけ別の紙を準備していても良かった気がしました。

・単元計画がとても工夫されていました「もうすぐ雨に」の前に似ている文章構造（現実，非現実，現実）を持つ「つり橋わたれ」を学んでおくことによってファンタジー特有の文章にも読み慣れるのではないかと感じました。あまりなじみの無い文章を読む場合はやってみたいです。

・振り返りの書き方が，わかこさん（わ＝分かったこと　か＝関わり，他者，教師，テキストとの関わりで分かったこと　こ＝これからどうするの）という風に分かれていました。これを２、３分で書ける児童がすごいとも感じました。これは振り返りをして児童が次の時間の見通しが持てるような振り返りにするための工夫だそうです。



（４） 分科会について

１年生の分科会と同じように，質問の数は少ないですがとても内容の深い質問ばかりでした。出た意見は以下の通りです。

・「より児童が楽しめるような授業を実践すべきなのではないだろうか。もっと作品を味わえるよう授業をすべきではないか。」という意見が出ました。授業者はファンタジーの読み方，非現実についてより注目させたくてこのような授業を実践したそうです。しかしファンタジーをより味わい楽しめるような授業を実践できたのではないかという見解で落ち着きました。（具体案までは出ませんでした。）

・写真を見ていただければ分かると思いますが，やはり教科書の本文を印刷した文章がすこしごちゃごちゃして分かりづらいという意見が出ました。授業者としては，今までの学習から主人公の気持ちを読み取らせたかった様です。しかし児童がどこに注目していいのか分からないという意見が大半でした。

助言者から

・主体的な学び

独立行政法人教職員支援機構次世代型教育推進センターのピクトグラムを参考にする。児童が興味・関心を持てるように授業すべき。

・深い学び

児童がプロセスイメージ（課題を達成する方法を考えられること？），ゴールイメージ（振り返りのイメージを持って学習すること）をもって学習すること。

・まとめと振り返りの違い

まとめ：本時の課題に対する答え・結論。つまり学習内容に気付かせるもの。

振り返り：振り返りは、学習の方法に気付かせるものである。また、学びの成果を実感させ、自己の変容に気付かせるもの。児童に片方だけでなく両方させるべき。そのため弘前大学付属小学校の「わかこ」は、効果的である。

５　講演会　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

新学習指導要領が来年か全面実施ということもあり，タイムリーな話題でした。実際の児童の様子から主体的・対話的で深い学びについて分かりやすく説明して頂きました。内容が多岐に広がりまとめる事が難しかったため今回は割愛させて頂きます。興味がある方は、youtube で独立行政法人教職支援機構「期待する学び（no4)」「深い学び（no25)」「校内研修（no58)」を見てください。ほぼ同じ内容について講師の田村学先生が講義してくれています。

最後になりましたが各先生お忙いなか研修に行かせていただきありがとうございました。